

家とともに人に歴史あり

兵庫県神戸市立魚崎中学校

一年 山中 結衣

今、私の祖父母の家はリノベーション中である。母、そして祖母ともう私知らない先祖が代々住んできた家だ。曾祖父はその地域でも名の知れた腕のよい大工だったそうで、棟梁としてその家を建てたという。阪神・淡路大震災では隣近所や母が通っていた中学校でも大きな被害があったが、その家はほぼ被害がなかったらしい。そんな地震にも動じなかった家が、工事の重機によってまたたく間に解体されていく様子を見ている祖母は寂しそうで、母も感慨深げだった。自分たちが生まれ育ち、そして結婚し自らも子供を育ててきた住まいであり、私の知らない思い出がそれだけその家にはたくさんあったのだろう。

子供たちや孫たちが巣立っていった家は、高齢の祖父母たちには使っていない部屋や昔ながらの急な階段は使い勝手も悪くなっていた。

今回建物を解体する際には、工事の騒音やほこりなど周囲に迷惑がかからないよう、工事の人が防音シートを貼ったりしていた。また解体し使わなくなった材料の処分にかかる高額な費用、廃棄する場所、ただ壊して新しく建てるという単純なことではないことが分かった。

リノベーション後の家には、以前大黒柱に使っていた木材の一部が形を変え、新たに再利用されるらしい。こうして有効に活用することで、たくさん思い出が詰まった家が全く違うものになるのではなく、人や地球のことを配慮した住まいになるのだろう。

以前の家の玄関にはなかったスロープや手すりを付けたり、家の中の段差をなくしたり祖父母が安心・安全で住み心地の良い家が完成することを私はとても楽しみにしている。そして、その家には子供たちや孫たちが集まり、また新たな家族の歴史が刻まれていくだろう。